

わたしの恵みはあなたに 十分である

内藤 淑枝



夫の文男さんと

イエス様との出会い

イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」すると、すぐ、彼らは網を捨て置いて従った。(マルコ 1・17、18)

一九五八年五月、私は、学寮の自分の部屋に坐つて聖書を読んでいました。このみことばまで来た時、シモンとアンデレのようにイエス様について行きたいと思いました。読み進んで行くうちに、次のみことばで涙があふれてきました。

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いつさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

(ペリピ 3・8)

幼少の頃、私を可愛がってくれた祖母が他界して

以来、母の愛が得られないと感じており、愛を得たいばかりに、かえつて反抗し、高校を出る頃には母との関係が最悪となっていました。人の愛に対する飽くなき欲求ばかりではなく、努力もしないのに能力に憧れ、周囲の人々を羨(うらや)ましく思い、また、美しく着飾りたいとも思いました。そのあげく、心の曲がつた自分がつくづく嫌になっていました。

このみことばの深い意味は分かりませんでしたが、パウロはイエス様に出会ってから、それまで価値を置き、より頼むところであったイスラエル人の特権や学問、律法に對しての熱心を、「わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いつさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてのものを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。」(口語訳ペリピ 3・8)、と言うのです。

「イエス様。赦してください。お母さん。ごめんなさ

い」と声をあげて泣きました。

価値観が一八〇度転換しました。人の心の中には良いものはないと聖書を通して知らされ、母に対する要求が不当であったと気付かされました。自分の醜(みにく)い心もイエス様はご存知で、赦してくださいと信じることができ、安心しました。

六月のペンテコステの礼拝の際、教会で受洗し、夏休みに見違えるようになって帰省した私を見て、母は心から喜んでくれました。以来いつも、「イエス様は良いものじゃ」と言ってくれていました。

スモン病による試練

一九六九年四月、二十八歳の頃、娘が三歳でしたが、スモン病と診断され、三年近く岡山大学病院(以下、「岡大病院」)に入院しました。スモン病は、足先から胸まで奇妙な痛みとシビレで徐々に歩けなくなり、目も見えなくなっていくという奇病です。後になって

整腸剤キノホルムによる薬害と判明しましたが、当時は伝染病として世の中で恐れられていました。

岡大病院では、この病気をウイルスによるものと考えていて、私は六人部屋に隔離されました。ステロイドの大量投与に加えて、腸のウイルスのためにキノホルムが更に投与され、皆、病状がどんどん悪化し、目が見えなくなった人も出て再起が見込めない中、不安と痛みで悲惨な状態でした。トイレや身の回りの世話を家族に頼めないうえ、危険手当と称して高い日当で付添人を雇いました。夫の月給の何倍も医療費がかかりました。

私は聖書を持って入院していたものの、みことばに頼ることも、主にゆだねることも忘れ、自分でなんとかしなければと思えば思うほど、自分を追い詰めていました。

仕事が忙しい中、夫は週に一度暗い顔をして見舞ってくれるものの、入院が長年にわたっているうちに、

夫の気持ちが私からスーと遠のいたと感じる時があり、このまま私が生きていては夫に迷惑をかける、死んで解放してあげなくてはと、死ぬことばかり考えるようになりました。夜中まで悶々（もんもん）として悩んで、いつも行きつくところは、今日も一日、ご家族の付き添いで入院している同室の人たちを憎み、ねたむ心で過ごした、ということへの苦しみでした。そこから始まって、主を信じてからも犯してきた数々の罪の責めが具体的に襲ってきて、たまらなくなり、「イエス様。御免なさい。助けて」と心の中で叫んでいました。こうしているうちに平安になって眠れたのか、いつの間にか朝を迎えていました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ 1:9）

当時、みことばに頼ることを見失っていましたが、主はそのような私にこのみことばを体験として成就してくださったと今更ながら感謝しています。

このスモン病の原因が薬害と判り、厚生省が使用を禁止してから、シビレと痛みは残りながらも何とか退院することができました。この病によつて、夫だけではなく、両親や、風評被害で弟や妹にも迷惑をかけました。

ベック兄との出会い

一九八五年の冬、夫と娘と一緒に、倉敷市の若山兄弟宅での集会でベック兄にお会いしました。

ベック兄は、家族の救いは主のお約束であり、「吉祥寺集会には、未だ救われていない夫を持つ姉妹たちの重荷を共に担ってくれるピリポのような兄弟たちや、ルデヤのような姉妹たちがいます」とおっしゃいました。

それまで、私は教会に集い、娘は日曜学校に集い、一

方、夫も時には付き合ってくれましたが、イエス・キリストはどうしても信じられないと言っていました。

当時は、夫は夜遅くまで働き、土日はゴルフ、私も体調が整わないまま、家の中は何の一致もなくバラバラだと思い始めていました。

夫の救い

その年の春、主は夫に東京転勤を与えてくださいました。吉祥寺集会には、本当にピリポのような兄弟たちや、ルデヤのような姉妹たちがおられました。

翌年夏の軽井沢でのバイブルキャンプの時、重田兄弟が別荘に招いてくださり、夫に本気で福音を伝えてくださいました。このお交わりと、ベック兄のメッセージのみことばにより、信じたいという気持ちを、主は夫に与えてくださいました。

けれども、夫は、今信じて、また信じられなくなったらどうしようかと、信仰告白ができず迷っていま

した。夕食の交わりの時、重田姉妹の「私だって、いつもいつも信仰深いわけではありませんよ」のことは、ほっとして隔ての壁が砕かれたようで、「お世話をおかけしました」とポロポロ涙を流しました。主は、夫を救ってくださいました。

兄弟姉妹方も寄って来られて、「良かった、良かった」と喜んでくださり、このことが私にとって、一生のうちで一番嬉しいイエス様からの贈り物と心から感謝しております。

ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。
(ルカ 15・10)

帰りの電車の中で、夫は「今からイエス様の救いを信じます」と書いて渡してくれました。翌日の朝から、夫がまず先に祈ってくれるようになりました。

と謝ってくれました。私はすぐさま、「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」(イザヤ 43・25)のみことばを紙に書いて渡しました。

罪が赦されたことを喜んだ夫は、当時開かれていたあちらこちらの家庭集会の証しで、そのことを話すので、私の方はだんだん腹が立ってきました。人間には罪を赦すことはできない、ということをつくづく思い知らされました。そして、私がいっぱい犯した罪やわがままのすべてを、イエス様は十字架のみがわりの御業によって拭い去ってくださったことに改めて思いを致し、御前にへりくだらざるを得ませんでした。同時に、夫に対して私が何と至らなかつたのかと悔い改めました。

娘の結婚

娘佐知子は三歳の時から小学校に上がるまでを、私の手で育ててやれず、私自身と同じような育て方

家族の救い

間もなく、夫はこの喜びを自分の中にだけとどめず、「光よあれ」や「実を結ぶ命」を持って、幼い頃にお世話になった親戚中の人たちに「イエス様を信じました」と知らせる旅をしました。

その年の秋、私の両親が倉敷の若山兄姉宅でベック兄にお会いすることができました。また、数年後、九十八歳になつていた父の兄、翁一伯父さんもベック兄とのお交わりで救いの確信が与えられ、伯母にも伝えて翌年天に召されました。それから十二年後、父も天に召されましたが、一〇二歳まで岡山集会の礼拝に寄せていただき、毎年喜びの集いでベック兄にお会いするのを楽しみにしておりました。

罪の告白

夫が救われて暫(しばらく)くしたある日、二人で祈っている時突然、以前に犯した罪を告白し赦して欲しい

をしてしまい、その上、高校からは東京の音楽高校の寮に入れてしまい、本当にかわいそうなことをしてしまったと思っています。

しかし、主は娘に天真らんまんな心を与えてくださいました。娘には結婚願望がありました。

「救われた兄弟を与えてください。それ以外は何の条件も望みません」と祈った時、その通りの中村浩一郎兄を与えられました。

今では、片時も離れずにお舅(しゅうと)さんを介護していますが、その博義お父さんも救われ、親子三人で平和に暮らさせていただいています。

肉体のとげ

スモン病以来、胸から下のじんじんと締め付けられるような痛み、シビレとだるさ、氷の上にいるような感覚と、足の鈍い痛みにさいなまれ、これが主からの試練と思っても受け止めることができませんでし

た。これに気を留めると、気が狂いそうになります。痛み止めや安定剤を多用しても悪循環でした。

私は、高ぶることのないようにと、肉体に二つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

(2コリント 12・7～9)

主は、私に、このみことばによつて、とげを恵みと受け取るようにしてください、この苦しみを感謝できるようにになりました。

その後与えられた顔面麻痺(まひ)や突発性難聴、結核性胸膜炎も、それぞれ意味があり、感謝をもって受け止めることができました。入院中、兄弟方がみことばをもつて励ましてくださったことも感謝いたします。老化するにしたがい、様々な余病が発生してきます。しかし、主イエス様の励ましと慰めと平安が心に満ちてくださいますので、ありがたいことです。

岡山集会

二〇〇六年、私たちは娘の嫁ぎ先の近くにと考えて、倉敷にある以前の家に戻って来ました。

岡山集会では礼拝の後、兄弟姉妹の祈り会があり、家族の救いのお約束への感謝と友人知人がたの救いを祈っています。そして、徐々(じょじょ)に新しく兄弟姉妹が救われ、主の御業に感謝しています。

あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなた

がたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによつて、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。

(ヨハネ 13・34～35)

最後に

神は最後に一番良い仕事を残してください

それは祈りだ

手は何も出来ないけれども

最後まで合掌出来る

愛するすべての人の上に 神の恵みを求める為に

すべてをなしておえたら

臨終の床に 神の声を聞くだろう

「きたれ我が友よ 我汝を見捨て」と

これは、召された母が最期まで愛読していた詩「最

上のわざ」の一節ですが、私にもこのような時が近づいてきたと思う昨今です。

イエス様が、ベック兄、両親、愛する人たちの待つている天国に呼んでくださるまで、私の内に住んでくださっている御霊様に信頼して、夫とともに祈りながら生かしていただきたいと願っています。

内藤淑枝(ないとう よしえ)

一九四〇年 岡山県倉敷市生まれ

岡山県立倉敷青陵高校卒／青山学院女子短大卒／聖和女子短大卒

聖和大学付属幼稚園教諭／結婚後主婦

夫：文男(ふみお) 長女：中村佐知子(なかむら さち

こ) 長女の夫：中村浩一郎(なかむら こういちろう)

恐れるな。虫けら…
わたしはあなたを助ける

児玉 尚志



妻の典子さんと

しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によつて祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

疑いを抱く人々をあわれみ、火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によつて汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。

(ユダ 20、23)

1 救い

東京の私大での四年間以外はずっと広島生活の私が就職したのは地元広島市役所でした。高校の同学年だった家内と二十六歳で結婚。家内の実家は歩いて二〇分あまり、同じバス停での互いの高校生姿を懐(まぶた)に思い出せます。しかし、当時は口をきいたこともなく、まさか結婚相手になろうとは思いませんでしたが、

これが私とイエス様との出会いに繋(つな)がりました。

家内に霊の飢え渴きが与えられ、主によつて近くに集会の姉妹が備えられ、まず家内が救われました。家内の勧めでご兄姉宅での家庭集会に行きベック兄と出会ったのをきっかけに、礼拝、家庭集会、御代田にも時折は集うようになりました。一九八八、八九年の頃のことです。些細(ささい)なことに思わず腹を立てることの多かった私に、ある日の夜、主はみことばをくださいました。

怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。
(詩篇 37・8)

主は穏やかに囁(ささ)んで含めるように、私の乾いた魂にみことばを注いでくださいました。しかし岩地に落ちた種子のごとく私の信仰は根を張ることなく、おまけに交わりが苦手で、仕事が忙しくなるといつしか集会から離れ、その後七年は、礼拝や喜びの集いに家内と子供たちが行くのを見送る、信仰的に

は家庭内別居状態でした。仕事中心で家庭はこれを支えるものというのが私の価値観でした。

一九九五年の秋、仕事の関係もありアメリカ西海岸の港湾開発を見たくてロサンゼルスでの海外キャンプに家族で参加しました。みことばづくしの毎日、兄弟姉妹の生き生きとした様子、主にある家族的な絆(きずな)とその中心におられるイエス様への信頼。これを契機に聖書を読む日々が回復しました。集会にも再び顔を出すようになりました。

しかし、一度は信じたけれど離れた、という経験は私を慎重にさせました。お前の信仰は人頼みじゃないか。心の内側の声は私の後ろめたさを見逃しません。こんな信仰では、またたやすく離れることになる。それに加えてその頃、次のみことばが私に恐れを抱かせていました。

一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあず

かる者となり、神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。

(ヘブル 6・4～6)

御代田でベック兄に相談するよう導かれました。ベック兄の答えは「イエス様は赦したくて赦したくてしようがない方だよ」でした。その後しばらくしてイエス様は「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」(詩篇 37・5)というみことばに従うよう私の思いを導いてくださいました。こうして一九九七年三月二十三日、御代田で受洗。長い間祈り続けてくださった多くの兄弟姉妹方とその内におられるイエス様に感謝しました。みことばに触れてから十年が経っていました。

その後、集会合唱団での賛美、三年間の東京での転

勤生活での兄弟姉妹との交わり、祈り会などを通して、私も主のみからだである教会の一部とされているという喜びを経験しました。か細く短い私の信仰の縦糸をしつかりとした兄弟姉妹方の横糸で補強されながら織り上がっていくような私の信仰の布でした。

2 確信

(過去の罪)

広島へ帰任後のある時期にベック兄が繰り返しりバイバルのメッセージをされ、みことばが過去の私を探ってきました。救われる前のことで自分としてはイエス様を信じ受け入れた時にすでに赦しを得たはずのものでした。しかし、主のみことばは私の罪を改めて光に照らし、明るみに出すよう勧めてきました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ 1・9)

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」(イザヤ 1・18)

今さら、とためらう日々。さらにみことばは私を追い詰めてきます。

もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。(1ヨハネ 1・10)

偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。(1ヨハネ 2・22)

明るみに出さないことは罪を犯していないと言い張ることであり、神様を偽り者とする事、それは

反キリストへの道を突き進むこと、というところまで追い詰められました。ここに至ってやっと家内に打ち明け、心から謝りました。二人で祈りました。明るみに出せたことをイエス様に感謝しました。

(つばやく私)

しかし、喜びもつかの間、二人の間には悲しみと疑いが波立ち、暗く拡がるようになりました。どうして赦してくれないのか、次第に私は苛立(いらだ)つてくるようになり、心の中でイエス様にも眩(つばやく)いていました。

罪を告白し、すっかり悔い改めたつもりでしたが、家内の悲しみや苦しみがどんなに辛いものであるか推し量つてやれる優しさもなく、私の中にはイライラするものが湧いてきます。そのイライラこそが保身、逆恨み、見栄(みえ)、強情、虚栄、責任転嫁、自己憐憫(れんびん)などが渦巻く私の実像でした。私は自分にどうしようもない罪深さを感じました。また、過去の自分が

今の家内を傷つけている、ということにどうすることもできない自分への無力感、絶望感がありました。

しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人の
そしり、民のさげすみです。 (詩篇 22・6)

もがけばもがくほど泥沼に沈んでいく自分の内側に、必死に肉の王座にしがみつこうとする醜(みにく)い自分の本当の姿、私の罪の本質を見ました。当時、旧約二箇所、新約二箇所を順に毎日拝読していましたが、詩篇の聖句と同時に次の聖句が与えられました。

恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたし
はあなたを助ける。 (イザヤ 41・14)

イエス様の憐れみに涙が溢れ、震えました。虫けらの私を虫けらと知った上で慈しみに満ちた眼差(まなざ)しで呼びかけ励まし希望を与え続けてくださる神様。

た。これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議な
なことである。 (詩篇 118・22・23)

3 二人の兄弟 (実父の救い)

二〇〇一年(平成十三年)六月、私の父は七十五歳で主のもとに召されました。地上での最後の八か月、肉的には壮絶な闘病でした。短期間に悪化していく悲惨な状況で、付き添っていた母は突然悲惨な病を与えられた夫を持つ妻という意味で、ヨブの妻と呼ばれました。

主は私を連れ去って、光のないやみを歩ませ、御手をもつて一日中、くり返して私を攻めた。主は私の肉と皮とをすり減らし、骨を砕き、苦味と苦難で私を取り囲んだ。…主は弓を張り、私を矢の的のようにし、矢筒の矢を、私の腎臓に射込んだ。(哀歌 3・2・5、12・13)

母は、これより数年前にイエス様を受け入れ御代

(私の十字架)

この時イエス様の十字架がはっきりと私の十字架になりました。家内に神様から罪の赦しをいただいたことを伝え、家内のことをよろしくお願いしますとイエス様に祈っていると伝えました。ほどなくイエス様は家内に平安をくださいました。

キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを二にし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。 (エペソ 2・14・15)

この体験は私たち夫婦にとって本当にかげがえない恵みとなりました。罪に対するどうしようもない心の葛藤(かつとう)。そして与えられた主の赦しと平安。この体験は私がどんな者か、どこに立ち返るべきかを思い出させる原点となっています。

家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になっ

田で受洗していました。毎日病室と自宅の往復で眠れない日々の中、イエス様に不安を叫ぶようになりました。ある夜、夢の中にイエス様が現れ「私が正彦(父の名)を引き受けたよ」と仰り、見るとその両腕に父は抱かれていたそうです。その時から母は、父をイエス様にお委ねできるようになって心配なく眠れるようになったそうです。日々衰えていく父でしたが、集会の兄弟姉妹、メッセンジャーも交わりに来てくださり、祈りで支えてくださいました。

主は肉の目には不可能と見える中でも多くの魂を救ってこられました。父の場合もそうでした。二〇〇〇年十一月、一時帰省して病室にいた私は初めて父の枕元で聖書(伝道者の書)を読み、神様に祈りました。父は目を瞑(つむ)り静かに頷(うなず)いていました。数日後、島根喜びの集いの後、わざわざベック兄が広島から参加のご兄弟の車で病床の父に会いに来てくださいました。不思議でした。それまで力なく横たわってい

た父がベッドに半身を起こし、ベック兄の訪問を謝し主のご愛を受け入れ、共にイエス様に祈りました。私たち家族にとって奇跡でした。父は笑顔でベック兄に「今度お会いする時はもう少し男前におきます」と言い、ベック兄も「それは楽しみだねえ」と返され、目には見えませんがイエス様がここにおられる、とその場の誰もが感じました。あとで父が「実は信仰に誘ってくれるよう、そしてベック兄が来てくださるようお願いしていた」と言つたと聞きました。それまでの様々な思いから、父の信仰へのお導きは相当困難なことだと思っていた自分の不信仰を改めて示されました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

(イザヤ 59・1～2)

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。…なぜなら、御霊のことは御霊によつてわきまえるものだからです。(1コリント 2・14)

私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。…すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。(1コリント 9・19、22)

イエス様は二人も滅びることを望まれず、失われた羊をどこまでも探し救おうとされるお方なのに、そのみこころを顧みることなく、独りよがりの信仰で姉に接していた私自身が、実は主の前に頑(かたく)々な、邪魔する者でした。

(義父との兄弟の交わり)

義父はクリスチャンホームに育った根っからの信者でした。ある時私は、主に導かれ過去の罪のことを義父に謝りました。義父は真剣に耳を傾け、「…イ

父の葬儀は、先祖以来初のイエス様中心の集会の葬儀で、お墓も一族の戒名が彫られている墓碑に初めて漢語体の聖句が記されました。後を追うように二年後祖母が百一歳で召されましたが、父よりも前にイエス様を受入れ祈つていたことから、親族の反対もなくイエス様中心の葬儀でした。

(姉へのお詫び)

姉は父の葬儀で躓き、それを契機に集会やイエス様への信仰に対して反発、不審感を抱きました。私の配慮不足からでした。

二〇一七年の元旦、妥協することと失われている魂への愛ある態度の関係を示され、初めて心から姉に当時の自分の配慮のなさや長い間の非礼を詫言しました。姉の口調は穏やかで温かいものになり、互いの近況を昔のように楽しく語り合えました。

イエス様は赦されたよ」と言ってくれました。

その後二日して義父から一通の短い手紙をもらいました。「わかりました、私も許しました、と言うべきでした」と記されていました。イエス様は、予期していなかった高みにまで連れて行ってくださり、互いの立場や年齢などを超え、ただ主にある兄弟として、より深い交わりの中に運んでくださいました。このような恵みを与えられるお方は、唯イエス様おひとりだけです。

義父は百歳になる年の元旦、枕元に集まった妻、子、孫など一族を前に年頭の祈りをイエス様に力強い声で捧げてくれ、それから十日余りで天に召されました。

イエス様に信頼し一致して祈るとき、イエス様が働かれることを経験します。二人でも三人でも主の名において集まるところに奇跡を体験します。

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を二つ

にして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

(マタイ 18・19、20)

4これから

二〇二六年三月、定年を迎えました。

主は私の人生の節目節目にみことばを通して、敬愛する兄弟姉妹を通して、励まし、支え、予期せぬ助けをお与えくださいました。時には耐えられぬ試練、情けなく恥ずかしい失敗も数え切れません。でも主は見放さずじつと待ち続けてくださいました。振り返ればそんな苦い経験の方が霊の糧となっています。主の何にも代えがたいご愛に感謝でいっぱいです。

(二つの測りなわ)・・・仕事、身近な兄弟姉妹

定年後、団体の職員として働いています。とにかく、

働けるだけ働き続けたほうがよいとの思いに導かれています。現役時代、何度か辞(や)めようと思うこともありましたが、家内に「辞めてくるよ」と言うと、「ええよ、辞めてきんちゃん」と返り、その言葉に妙にほっとしたものです。ある時、次のみことばが与えられて仕事に対するスタンスを示され支えとなりました。

また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をすることを志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい。外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。

(1テサロニケ 4・11、12)

キリストによって、からだ全体は、二つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。・・・ですが

ら、あなたがたは偽りを捨て、おの隣の隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの二部分として互いにそれぞれのものでかたります。

(エペソ 4・16、25)

もし二つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし二つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。

(1コリント 12・26)

また、御子はそのからだである教会のかしらです。・・・このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によつて成長させられるのです。

(コロサイ 1・18、2・19)

(最後に)

今回、証しのお話をいただいて、与えられた箇所が冒頭のユダ書でした。ベック兄はこの個所から「主イエス様に愛されている幸せ」をますます経験していくために

どうすればよいのか？それは「築き上げ、祈り、待ち望み、救い出し、忌み嫌う」ことと学んでくださいました。

これからの日々を主のご再臨を待ち望みながら、御霊に従いその都度心を定めながら歩んでいきたいと思っています。そして愛する子供たちに、私たちの父さんは大した人じゃなかったけれども、真面目に主に従う人であったね、と少しは言われる結末でありたいと心から願っています。

兄玉尚志(こだま たかし)

一九五五年広島県広島市生まれ

広島市立基町高等学校、政法大学法学部法律学科卒業

広島市役所(定年退職)現在団体職員

妻・典子(のりこ)

子三人・桂子(けいこ)、晋太郎(しんたろう)、

健治郎(けんじろう)

父の存在

小池 志将



後列左から3番目が志将さん、その前にお父様の沖宗さん、ご家族といっしょに

私の家族は、父、母、姉一人、兄二人の六人家族です。父は二〇一三年の二月に、姉は産まれてからわずか十日で、それぞれ天国に召されています。父は二十代で会社を起業してあらゆる事業を行っていましたが、私が生まれる前からすでにたび重なる会社の倒産により多額の負債を抱え、小池家は常に経済的に貧しい生活を送っていました。

貧しくてもいいから堅実に働く父を求めましたが、それとは反対に、父は倒産するたびにさらなる野心を抱いてまた新しく事業を始めました。四十数年間ずっとその繰り返しでした。その他にも、父の気性の荒さ、親族への借金や女性問題など、母と息子たちにとって、父の存在は悩みそのものでした。

しかし、父以外の家族は皆イエス様への信仰を与えられていました。その貧困と悩みの中でもイエス様に祈り、頼り、心の守られた母と兄二人を見て、そこに平安と希望があることを感じ、どんな環境で

もイエス様に依り頼んでいく先には必ず最善の導きが用意されているという不思議な安心感がありました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16・31)

この聖書のみことば、約束が与えられていることも信じていました。

私が高校二年の夏のことです。歳の離れた兄二人はすでに就職して上京しており、私は父と母と三人で千葉の実家で暮らしていました。経済的にさらに苦しくなって食べる物も底をついていましたが、それでも生き方を変えない父との生活にも限界を感じていました。

そんな中で、母と私が父から一時的に離れて、東京で兄たちと一緒に暮らすという道が開かれました。

11人の証し

Unser Herr lebt

ただ、父がそれを承諾してくれるわけありませんから、ある朝、父の出勤後に夜逃げ同然で荷物を運び出し、母と私はそと家を出ました。父の気持ちを思うと心苦しく、複雑な気持ちで東京へ向かったことを覚えています。

そのときの私たちの行動が正しかったかどうかは、正直今でも分かりません。ただ、家族・親族で主の導きを祈り求めた結果与えられた選択肢であり、父にもこの試練を通して自分の力ではなく、イエス様に頼り生きてほしいという祈りと願いを持って、進んだ道でした。その先のことは、イエス様が家族それぞれに対して必要のすべてを備えてくださると信じていましたし、心は平安でした。

それから私が社会に出るまで、母はもちろん、兄たちも、経済的・精神的に親代(が)わりとなって私を養ってくれました。

イエス様の十字架

幼いころからキリスト集会に集い、自然とイエス様を信じて祈る生活を送っていた私ですが、イエス様に生かされている恵みを心から喜ぶようになったのは、二十歳を過ぎて社会人になってからです。

就職して数ヶ月経ったころから、上司との関係や自分の無力さに悩み苦しむ日々を過ごすようになり、真剣にイエス様に助けを求めるようになりました。聖書も毎日読まざるを得なくなり、仕事中心の生活の中でも祈り、聖書のみことばを読んでいた。

主(イエス様)は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。……なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。(2コリント 12:9、10)

何度このみことばに励まされました。イエス様から慰められ、苦しい状況は変わらなくても、不思議なくらいに心は平安でした。イエス様の存在を、いつも近くに感じていました。兄弟姉妹方と交わり、祈り合う時間が一番の楽しみと喜びになりました。

そんな中で、イエス様に喜ばれる歩みをしたと思うようになった私は、無意識の内に自分の力で正しくあろうと努力していたように思います。すると、自分自身が対外的にも内面においても日々犯す罪ばかりに目がとまるようになりました。そのたびに苦しくなり、自分がキリスト者であることすら疑い、喜びの生活から一変し、落ち込む毎日となりました。しかし、それが必要なことでした。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

(ローマ 7:15、24、8:1、2)

自分の意思や努力では、どうあがいても罪の問題を解決できませんでした。

けれども、だからこそ私には、罪のないイエス様の十字架上での犠牲、流される血潮が必要でした。そのとき初めて、イエス様の十字架の贖(あがな)いが私のためであったことを心の底から感じ、信じました。私の内に、イエス様への悔い改めと、感謝と、喜びが湧(わ)き上がりました。

父の救いと天国への導き

それ以来、もし当時のような自己嫌悪感に苛(さ)いな(ま)れることがあっても、そのたびに最後には必ずイエス様の十字架へと心が導かれ、イエス様の絶対的なご愛に満たされます。私は不真実でも、私の内には愛と真実に満ちたイエス様が住んでくださっていますから、感謝します。

十七歳のときから始まった父との別居生活でしたが、数年間の音信不通の後、祖父の葬儀や兄二人の結婚式など、本当にわずかではあります再会する場が与えられ、それから少しずつ機会が増えていきました。そのころ父は千葉に住んでおり、ときどき市川のキリスト集会で家族と共に礼拝にも参加してくれていました。

しかしある時期から、父と一緒に礼拝に出席しなくなり、私たち家族と同じ土台には立てないと言う

ようにもなり、そして突然連絡が途絶えました。後にわかったことですが、そのころ軌道に乗りかけていた事業がまた失敗し、再び多額の負債を負うはめになり、父は、これ以上家族に迷惑をかけられないという思いで、家族から姿を消したようです。電話もつながらず、それまでの自宅兼事務所からもいなくなり、再び音信不通となりました。

それから約五年後の二〇二二年七月に、父の仕事関係の方から私たち家族へ電話がありました。それは、父が肺癌の末期で入院中であることの報告と、病状と今後の治療について医師から説明があるので、その場への立ち会いのお願いでした。この電話は父が頼んだことではなく、その方のご配慮によるものでした。突然の知らせにとっても驚きましたが、すぐにイエス様のご計画であると思われました。

そして、翌月の八月十五日に家族全員で五年ぶりに父と再会しました。本当に嬉しかったです。再会

してからの父はイエス様と出会い、すっかり心碎かれた者へと変えられ、私なんかよりもずっと、イエス様の前に誠実に生きていました。

イエス様と家族と共に過ごした闘病生活の末、再会から約半年後の二〇二三年の二月二十七日の夕方、父は私の目の前で息を引き取り、イエス様の御許（みもと）へと導かれました。父の前で、お見舞いに来てくださった集会の兄弟と兄と私の三人で順番に感謝の祈りを捧げた直後、すでに会話することもできなくなっていた父は、言葉にならないような声で喉を鳴らし、天に召されました。私には「アーメン」と聞こえました。イエス様がその場におられることを感じていました。

色々なことがありましたが、主は、みことばの約束を成就してくださいました。父と母は、四十数年の歳月をかけて、イエス様を柱とした本当に愛し合う夫婦へと建て上げられました。そして私たちをイエス

様にある家族として二つにしてくださいました。この背後には、同じキリスト者である愛する親族や、多くの愛する兄弟姉妹方の長年のお祈りのご奉仕があったということに心から感謝いたします。

仕事について

二〇二二年の四月に当時勤めていたデザイン事務所を辞め、その数ヶ月後から個人事業主として働いています。職種は主に紙媒体の広告物のデザインや、イラストレーションといったものです。

会社を辞めたのは自分の意思でした。約十年間の業界での経験を経て、自分の仕事の幅をより広げていきたいというのが一番の理由でした。もちろんそのことでは長く悩みました。祈りながら進んだ道に後悔はありませんが、退社によつて結果的には会社に迷惑をかけ、信頼を裏切り、家族にも、お祈りくださっていた兄弟姉妹方にも大変心配をかけました。

後になつてからようやくはつきりと悔い改めの思いが与えられました。

愛は隣人に対して害を与えません。(ローマ 13・10)

自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。(ピリピ 2・4)

このときの私は弁解の余地もなく、ただただ「イエス様ごめんなさい。こんな者ですが、これからあなただの御側（みそば）にいらさせてください」と祈ることしかできなくされていました。

私は元来、独立思考はまったく持っていませんでしたし、コネやツテもなく、一人で食べていける保証は何もありませんでした。ですから、独立を意識するようになってから決意するまでの数ヶ月間は、またとても悩みました。もちろん他のデザイン事務所に就職

するという選択肢もありました。

主の御心がどこにあるのかは分かりませんでした。祈り、聖書を読み、兄弟姉妹方と交わっていく中で、「この先の人生を、イエス様にだけ依り頼んで生きてみたい。もしイエス様が道を開いてくださるなら、必要は満たされる」という思いが与えられました。

人の歩みは主(イエス様)によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。

その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

(詩篇 37・23～24)

神の国とその義とをまず第二に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あ

という思いが湧き上がります。

人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。(マタイ 16・26)

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ 14・6)

自己愛とイエス様の愛

私は今まで、家族以外の人間関係にも恵まれて歩んできました。にも関わらず、私は自分のことしか愛せません。自己愛と自己中心の塊(かたまり)です。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することとせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをが

ります。

(マタイ 6・33～34)

これらのみことばに押し出されるようにして、独立を決意しました。開業してしばらくは想像していた通りの貧しい生活を送ることとなりましたが、むしろ貧しいときほどイエス様に生かされている実感と喜びがありました。「みころならば、必要な仕事を必要な分だけお与えください」という祈りをイエス様が聴いてくださり、今日まで過ごすことができています。

しかし、独立して二年目ころからそれなりに忙しい日々を送るようになった私は、仕事がある状況を当たり前に感じてしまい、感謝も忘れ、いつの間にか私利私欲に走る自分と出会うようになりました。そのことに気づかされると、そんな自分に空(むな)しさを覚え、イエス様の愛から離れている罪を悔い改めさせられ、同時にイエス様に祝福していただきたい！

まんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。(1コリント 13・4～7)

私の心・性質は、このみことばから遠く離れています。今までの三十数年間で、周(まわ)りのたくさんの方々、ときには家族でさえ愛せず、何度となく傷つけ悲しませてきました。きっと自分では気づいていないところでも。その一つひとつを思い返すと、本当に申し訳ない気持ちになり、自分にうんざりします。そんな自分が大嫌いですが、実際にはそれでも自分を一番大切にしようとするどうしようもない者です。

私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。

(ローマ 5・8)

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

(1テモテ 1・15)

言うまでもなく、イエス様は私と正反対の人格をお持ちです。理解を超えたことですが、イエス様はこんな私のことですから、受け入れて愛してくださいます。

ただ普通に生きているだけでも人を傷つけ、悲しませるような者であることを体験的に知らされたことは辛くても、幸いでした。その都度、イエス様のご愛へと辿(たど)り着くからです。私にはイエス様の十字架がどうしても必要です。そして愛に満ちたイエス様が大好きです。願わくば、そのイエス様の足跡につき従いたいです。

今まで様々なことばを身を以(もつ)て体験させ

られましたが、イエス様の前で素直に心を開いたときに与えられる聖書のことばは、ただの文字ではなく、私の内に生きて働いてくださる「私の足のともしび」「いのちのパン」です。

そしてイエス様は、私が日々あらゆることの中で味わう惨めさを通してさえも、ご自身との交わりへと招いてくださり、将来だけでなく今このときも、私の本当の国籍や人生の基準はこの地上にではなく天にあるという、平安と希望を与えてくださいます。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
(ピリピ 3・20)

いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。
(ルカ 17・21)

これからも愛する兄弟姉妹方の輪に加えていただきつつ、共に次のイエス様の祈り(みことば)の通りに導かれていきますように、祈り願っています。

わたし(神の御子イエス・キリスト)は彼ら(イエス様を信じる私たち)にあり、あなた(父なる神)はわたしにおられます。それは、彼らが全うされて二つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたことを、この世(まだイエス様と出会っていない方々)が知るためです。
(ヨハネ 17・23)

小池 志将(こいけ ゆきまさ)

一九八二年五月三十一日生まれ、

千葉市立長作小学校、千葉市立幕張中学校、習志野市立習志野高等学校卒、

日本デザイン学院 2部 グラフィックデザイン科卒、

株式会社アートプロ、株式会社アートバリエトッパ、

株式会社フルスケールを経て、現在、個人事業主

母・その子

兄・正悟(せいご)、克明(かつあき)

すべてを益としてくださる主

鈴木 博美



左から博美さん、孫の航くん、妻の紀子さん

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

私は昭和二十三年、福島県白河市で生まれました。中学を卒業して、給料をもらいながら高校の資格を取ることができた「少年自衛官」試験を受けました。合格して横須賀に行きましたが、入隊前の健康診断で血圧が185と高く、翌日再検しても下がらず、「命の保障ができない」と家に帰されました。行くときは、意気揚々と「勝ってくるぞと勇ましく」の勢いでしたが、家に戻ったときには重病人となっていました。心臓のドキドキが耳に付いて眠れない。考えることは、「どうして、なぜ」と後悔と悔しさで心は暗く沈んでいました。家に閉じこもり、仏壇にあったお経を読んで心の平静を保とうとしたりもしました。外に出る

のは医者に行くときだけの生活でした。

中三の担任だった先生が心配して、学校の図書室に来て勉強したらどうかと手配してくれましたので、通うことにしました。一日中本を読み、貸し出しの手伝いをする日々が始まりました。しばらくして、ありがたいことに、臨時職員にしてくれ、給料も出してくれました。ある日、一人で作業していると、突然、背中をパンと叩かれ、「前進しろ」と言われました。瞬間振り向きましたが誰もいません。それが何だったのかわかりません。今は、主が、このときには働いておられたと思います。「そうだ前進しなければいけない」とそのとき素直に思いました。それで、帰りは思い切って歩いて帰ることにしました。一山越えなければなりません。途中まではなだらかな畑の中を歩き、最後は急な山道でしたが登りきりました。反対側もまた畑が広がり、私の家が見え、南湖という池がきらきら光ってありました。「ああやった」と

思うと同時に病氣も治るという確信が出てきました。果たして、健康も回復して、翌年遅ればせながら高校に入りました。

高校三年の春。教室掃除のとき、捨てられていたチラシを拾いました。近くの教会で、アメリカ人宣教師が無料で英語を教えるというのです。めったに外国人を見ることのない田舎のことで、早速行くことにしました。しかし、教会の前まで来ると、怖じ気（おじけ）づいて、入ろうか止（や）めようか、行きつ戻りつしましたが、英語につられて、エイ、ヤーと目をつぶって入りました。すでに八人ほど集まっておりました。アメリカ人のご主人と日本人の奥さんでした。実際に指導したのは奥さんの方で、英語より聖書の話が中心でした。夏休みになり、バイブルキャンプに誘われましたが、一応受験生ですので夏期講習会をすでに申し込んでおりましたので断りました。しかし、どうしてもと言われ、また、部分参加でもいいからと

言われましたので、一日か二日か忘れましたが講習の
ない日に参加しました。

宣教師の子弟が多く参加しており、ゲームも日本
のものでなく珍（めずら）しく、非常に楽しいもので
した。夜はメッセージがあり、中高生にも分かるよう
に話してくれました。話の終わりに、信じる人は手
を挙げてという招きがありました。私は、そういう
ものには心理的に受け付けないものがありましたので
手を挙げることはありませんでしたが、中には手
を挙げる人もおり、「手を挙げる人もいるのだなあ」
と思ったものでした。

翌日、昼食後、帰り支度（したく）のため部屋に戻っ
たところ、突然、声がありました。メッセージで聞いた
みことばでした。

あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに
信じる者は幸いです。
(ヨハネ 20・29)

主はみことばをもって迫られました。私は「ノー」
と言いました。しかし、また「見ずに信じる者は幸い
です」という言葉が響いてきます。振り払っても振り
払っても、みことばが迫ってきました。その度に「ノー」
を言いました。その内に、心臓がドキドキし始めまし
た。息も苦しくなってきました。目の前には、信じる
ことのできない理由が壁となつてのしかかつてしまし
た。到底この壁をぶち破つてあるいは乗り越えて信じ
るなどできないと思いました。しかし、あまりの苦し
さに、ああ俺はこのままここで死ぬのかな、という思
いが起こりました。そして、ここで死ぬのだしたら信
じたほうがましかな、という気になりました。それ
で、「信じます」と言いました。すると、立ち塞がつて
いた壁が目の前から消えてなくなりました。180度向
きを変えと言いますが、これがそうなのかと思ひ
ました。それから、今度は喜びが心の底から溢（あふ）
れてきました。山から降りるバスは雲のようにふわふ

わして、喜びが次から次に溢れてきました。まったく
不思議でしたが、このことがこの五十年間主を信じ
続ける基礎となったと思います。

次の週からは、教会の礼拝にも出席するようにな
りました。信じることに洗礼はセットと思つておりま
したが、洗礼の話はいつこうにありませんでした。ク
リスマスにはあるかもしれないと思ひましたが、それ
もなく、自分から申し込みました。それで、東北の極
寒の二月に受洗しました。洗礼を受けたことにより、
親族親類の者に、否が応でも、クリスチャンになったこ
とを認めさせることができました。すぐに受験とな
りましたが、努力不足、実力不足で最後に残された
試験の、可否発表の日の朝となりました。その日の
日課である詩篇37篇を読んだとき、主からいち早く
試験の結果をいただきました。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道

(詩篇 37・23〜24)

を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されは
しない。主がその手をささえておられるからだ。

このみことばによって、「あつ、落ちたんだ」と確信
しました。しかし、落ちたけれども、立ち直る備えが
あると信じました。当時は文語訳の聖書でしたから
「確かにされる」ではなくて「定められる」とあり、
はつきりと私の人生にご計画を持つておられること
を知らしてくださいました。主は、失望ではなく希
望を与えてくださり、あらかじめ心備えをしてくだ
さいました。そうしていると、遠くからバイクの音が
して電報配達が来るのが見えました。やはり「桜散
る」でした。教会の姉妹が「試練ですね」と慰めてく
れましたが、自分としては試練というよりは希望が
ありました。

翌年、都内の大学に入り、杉並区にある教会の近

所に移り住み、教会活動、特に青年会活動に励み、会長も努めました。大学では、国際ナビゲーターという宣教団体の聖書研究会で活動しました。スタッフの先輩が宇都宮大学で学生伝道を開始するに当たってリクルートされ、卒業と同時に宇都宮に移り住みました。一年間、学生と交わり、聖書を学び、スポーツやキャンプへと学生時代の延長のような生活でした。しかし、伝道者としては召されていないとわかり、そのまま宇都宮で就職し、社会人として関わっていくことになりました。

就職して三年後、結婚について先輩が心配してくれて、東京で集会を持つている先輩のもとに集っていた姉妹を紹介され結婚いたしました。ナビゲーター同士の結婚でした。宇都宮で長女が生まれ、その後、妻の父親が高齢なので家の近くに移りたいと言い出しました。それで会社を止め、春日部に移りました。春日部では近くの教会に籍を置きました。十年ほど

経ったころ教会が分裂し、多くの方々が集会に移りました。妻も集会に行きました。私は教会に残りました。そのときから、家の中が分裂し、争いが起こりました。具体的には忘れましたが、非常に重苦しい日々が続きました。離婚を考えることはそれまでではありませんでしたが、別れることが唯一の解決方法ではないかという考えに囚（とら）われるようになったころ、重い足を引きずって会社から帰る途中、みことばが与えられました。主からの叱責でした。

悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。（1ペテロ 3:9）

みことばが来たので争いは止まりました。それ以来、春日部集会の兄弟姉妹に支えられて今日に至りました。

イエス様を信じたとき、主が私自身についてご計画

を持つておられることを知って、私の将来に対し、少なからず希望を持ったことはお話しした通りです。さて、今、その五十年後の未来に生きています。あの夢多きころの期待は、今、どうなのよ、と考えてしまいました。この世的には立身出世もなく、社会的地位や名誉にも縁遠く、経済的には家族に苦勞をさせました。しかし主は、一生の不覚、生涯最大の挫折という嘆きを、喜びに変えてくださいました。この五十年間、主にある者として約束の通り、祈りに答え、恵み支えてくださいました。「神の恵みによって、私は今の私になりました」とパウロは告白しました。過去五十年、私に対しても、主にあるものとして、恵みと憐れみの内に守ってくださいました。これからも、主の現れの日まで、「すべてのこと相働きて益なす」主が共におられることを確信させてくださいますので感謝です。

鈴木博美（すずきひろみ）

一九四八年 福島県白河市生まれ

白河高校、東京農業大学卒

会社員生活後、二〇二年退職

妻／紀子（のりこ）

長男／勇也（ゆうや）

長女／松崎加奈（まつざきかな）夫／松崎譲（まつざきゆずる）孫／航（わたる）

イエス様が教えてくれた大切なこと

三浦 敬



前列中央が敬さん、後列右が妻の愛子さん、ご家族と

私は一九八〇年に東京都目黒区で生まれました。両親は共働きのため、つねに鍵を持つている鍵っ子でした。両親とは週末にしか一緒にいる時間はありませんでした。寂しいと感じたことはありませんでした。むしろ自分の時間を自由に使えるので、両親と何かをしたいとはあまり思わなかったことも事実です。両親が共働きということもあり、生活には特に不自由なく育ててもらったと思っています。

そんな私が神様と初めて出会ったのは祖父の葬儀のときでした。祖父がクリスチャンということはいまだに知らず、葬儀場の方から今回はキリスト教式ですと教えられたときに、初めて祖父がクリスチャンだったことを知りました。生前、一緒に遊んでもらったりはしましたが祖父から神様の話を聞いたことはありませんでした。そんな祖父でしたが、私の父親が祖父に対して「何かをしてもらった記憶はないが、そんな父が休まずに教会に行き続けたことは不思議なん

だよな」と言っていた言葉が不思議と離れませんでした。なぜ祖父はそんなに教会に行き続けたのだろうかと思いましたが、そのことは心のどこか片隅にしまわれてしまい、私はまた自分勝手な日々を過ごしていました。これが私と神様の初めての出会いです。

神様と向き合うまで私は自分勝手に放蕩息子のよう日々を過ごしていました。大学に入学したものの、勉強にまったくついていけず、友人の作成したレポートを写すことはできても、試験はまったくできませんでした。二年生になったときには学校へ行くことすらなくなり、友人を誘って麻雀やパチンコ、スロットにビリヤードやダーツなどギャンブルでお金を稼ぎ、それを他の遊びに使っていくという、どうしようもない生活を送っていました。六年間大学に籍をおいていましたが、両親に謝り大学を辞めました。両親には迷惑をかけました。

大学を辞め、郷土料理のお店を運営している会社

に二〇〇三年に入りました。料理は小さいころから作るのは好きでしたし、友人にも食べて喜んでもらうことがうれしかったので、好きなことを仕事としてできるのが楽しみで就職しました。二十三歳のときです。飲食の世界は十八歳から働く人も珍しくなく、実際の職場での先輩は二十歳の方でした。年下でしたが、完全な縦（たて）社会ですので、年齢ではなく実力が上の人が言うことは絶対でした。そんな仕事も最初の三か月は日々覚えることと忙しきで一杯、何かを気にする余裕はありませんでした。そして、半年過ぎたあたりからある先輩社員の言動が気になるようになりましたが、そのときには人間関係で苦しい思いをするとは気がませんでした。

話は少し戻りますが、就職する少し前から妻の愛子姉妹とお付き合いが始まりました。姉妹からは自分分はクリスチャンでお付き合いするからには同じ土台の人がいいことと、結婚を前提でいて欲しいことを

きにふと姉妹からもらった聖書が目に残り、自分から初めて聖書を開きました。そのとき目に留まったみことばが詩篇の119篇105節でした。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。
(詩篇 119・105)

このみことばを見た瞬間、涙が溢れ、主の存在を信じました。ただイエス様一人を信じます、あなたについて行きます、と祈りました。すると不思議と気持ちが悪くなり、何とも言えない平安な気持ちに溢(あふ)れました。このことをすぐに姉妹に伝え、その後は姉妹と集会に集うお付き合いが続きしました。

二〇〇五年の四月十日に御代田の地で、主に結婚へと導かれました。しかし、結婚後の私は主ではなく仕事で第一の毎日でした。イエス様を受け入れて結婚へと導かれましたが、普段の生活で祈ることは

最初に言われていましたので、お付き合いしたいという気持ちが強かった私は、なるべく姉妹の希望に近づこうと努力をしました。礼拝や福音集会と一緒に集いましたが、人の多さに圧倒され、聖書の話は何を言っているかまったく分かりませんでした。愛子姉妹とお付き合いをして二年が過ぎたころ、姉妹のお母さんにお付き合いをやめるように言われました。神様を受け入れていなかった私は、なぜ別れるように言われたのかまったく理解できず、姉妹にどうして別れなければいけないかを聞き続けました。姉妹からは、私に神様のことを伝える役割を果たしたからと言われました。どうしてもあきらめきれなかった私は、ある兄弟とのお交わりを姉妹のお母さんに勧められ、お交わりをすることになりました。兄弟から慰められると思ってお交わりに行きましたが、兄弟からも同じ土台でないなら別れるべきだと言われ、私は悲しさのあまり家で泣いていました。そんなと

うな状態を過ごしていました。しかし主は、姉妹を通して集会に集うことだけは続けさせてくださっていました。今思うと、主から離れないように姉妹を与えていただき、一方的な大きな愛で見守ってくださっていたのだ、と感謝です。

自分勝手に主を第一としない生活に、主がはつきりと御心を示されるときがきました。あるときから上司の方とまったくうまくいけなくなり、ときおり言い合いになるほどの状態が続きました。職場には上司と私の二人しか社員はいないため、逃げ場はありません。仕事には必要最低限の会話しかなく、ときには叱責(しっせき)を受ける日々でした。精神的にも限界がきて、毎晩帰宅後の夜中に寝ている姉妹の枕元で、仕事がつらい、仕事を辞めたいとつぶやき続けていました。そんなときに与えられたみことばは、マタイ伝の22章39節でした。

ほとんどせず、日曜日以外は朝八時半から夜の十二時過ぎまで働いていたため、唯一の休みの日曜日は眠たく、姉妹にうながされて集会へ行っても一番後ろのほうで寝ていました。またお交わりも得意でなかったために、集会終了後はすぐに帰り、また家で寝ている状態でした。あげくの果てに、姉妹から今日のメッセージはよかったねと言われることが重荷と思うようになっており、夫婦で一致した祈りなどできませんでした。しかし主は一方的な愛で姉妹を通じてずっと私を呼び続けてくれたのです。そのことに気が付かず、主を第一にせず自分勝手な生活を送っていました。

二〇〇六年には長女が与えられましたが、その際も心から祈ることはほとんどせず、ますますこの世の生活になっていました。仕事しか考えていなかったせいか、この当時のことを思い出そうとしても、仕事以外、家族のことさえ何をしていたか思い出せないよ

あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。

(マタイ 22・39)

私は毎日このみことばに対して、「イエス様、上司を愛するようにしてください」と職場に行く途中祈り続けましたが、上司を愛することはできませんでした。主は私が自分勝手に思いやりや愛がないことを教えようとしてくださったのに、私はなぜ愛せるようにしてくれないのかと見当違いのことに苦しみ、愛せるようにしてくださいと祈り続けていました。本当に愛や思いやりのない者でした。そんな状態が半年続き、とうとう限界と思っていたときに、主は別の方法で脱出の道を導いてくださいました。違う会社には転職させてくださったのです。この会社は、朝は早かったのですが夕方には仕事が終わりに、家族で夕食を食べる時間を与えられました。そして家族で夕食のときに祈る時間を持てるようになりました。

また年中無休のお店でしたが、自分がクリスチャンであることを伝えることができ、日曜日に優先的に休みをもらえ、集会にも集い続けることができ、家族・仕事・イエス様のバランスがとれた生活を過ごせていると思っていました。しかし本当に大切なのは主と第一とした生活、ということには気が付かず、この世とのバランスを大切にしていました。あれだけ自分がダメな者と示されたのに、まだ夫婦で心から一致して祈れる状態にはなっていなかったのです。

こんな私たち家族を主はいつも憐れんでくださり、必要なものはいつも満たしてくださいました。転職後、私の給料は減っていましたが、姉妹も働いていたので心配はしていませんでした。両親が共働きだったせいもあり、姉妹には働き続けて欲しいと望んでおり、それがいいことだと思っていました。しかし、二人目の子供を妊娠すると共に姉妹がパニック障害になり、仕事に行けなくなりました。私の給料だけでは

ぎりぎりの生活で、いつも通帳を見ながらお金のことを気にする生活に変わっていききました。結婚と同時にマンションを購入しましたが、私の給料の半分がローンで消えていくような状態でした。

自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲むのかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。(マタイ 6・25)

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。

(マタイ 6・31)

だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。(マタイ 6・34)

年末には貯金もなくなり、年をどう越そうかと姉妹と考えていたら、職場の方からお米やときには果物を送ってくださいたり、子供たちの成長とともに洋服がなければ、そのタイミングで洋服が与えられたりと、主はいつも必要なことを満たしてくださいました。そして二人目の子供が生まれた二か月後にはお店の責任者となり、給料も必要な分、上げてくださいました。また長女も次女も生まれた日が二十五日ということで、給料日に生まれてくれたことも主の憐れみでしかありません。

また姉妹のパニック障害を通して、一番大切なことは何かを私たち家族にはつきりと示されたのです。パニック障害になった姉妹はある日、電車に乗れずに仕事にいけなかったと、泣きながら職場に電話をかけたきました。私はどういふことかまったく分からず、とりあえず家に帰ってゆっくり休みなさいと言いました。そして家に帰ると布団の中で動けない姉妹が

いました。そんな姉妹を見て私はどうしていいのか分からず、近くに住んでいた姉妹のお母さんに相談しました。

今思えばどうして一緒に折れなかったのかと思いますが、主を第二にしていなかったことと、夫婦で一致して祈ってこなかったため、主が夫婦として立て直しをしてくださるためでした。私は家のことをやらなければと頑張りました。長女のことや家事など姉妹のお母さんに協力してもらいながら、仕事帰りに買い物をしたり、料理をしたりと姉妹が早く良くなることを期待して頑張りました。しかし姉妹の様子はいつこうに良くなりませんでした。次第に焦ってきた私は姉妹に「どうしたらよくなるのか」、「早く良くなるように頑張れ」など見当違いの言葉を口にしていました。仕事に、家のことにと、懸命に頑張った私は疲れ切ってしまい、とうとう主の前でギブアップをしたのです。

思えば心からのギブアップは姉妹との別れ話が出

たとき以外になく、心からの限界を感じたのは初めてでした。どうしていいのか分からなくなった私は、姉妹が病気になって初めて心から、何かしてほしいことはあるかと尋ねました。それまでも、一緒に祈ってほしい、と言われたことはありましたが、聞き流していたのです。姉妹が言ったのは、家庭集會に連れて行って欲しいとのことでした。パニック障害は人ごみに行くことが不安になるようですが、このときの姉妹の言葉はまさに主が姉妹を通して、夫婦で一致してボロボロの状態の主の前に来るように、と言ってくださった瞬間でした。そして空っぽの状態で向かった家庭集會で初めて夫婦で満たされて帰ってきたことを、今でもはつきりと覚えています。起き上がることさえ大変だった姉妹、限界で落ち込んでいた私の二人して霊的な満たしを得て、帰りの車の中では主の栄光を喜んでいました。

このときから私は、姉妹が主にある交わりを通し

て元気になることを知り、家庭集會へ集い始めました。最初は姉妹が元気になるためと思っていましたが、主は夫婦で集うために姉妹に病気を与えられたのでした。また私は姉妹の病気を通して、「明日の心配は無用です」のみことばを食べることができました。姉妹の体調は当日になってみないと分からないため、計画が立てられないのですが、自分たちで計画を立てるのではなく、主の立てられた計画に従うこと、また明日やろうとしたことができてできなかったも、主が最善に導いてくださっている、と知ることができ、毎日が楽しく歩むことができるようになりました。すべて主が責任を取ってくださるとようやく気が付き、主を第一にすることができたのです。

今でも仕事では人間関係で悩むこともあります。が、朝家族で今日与えられた一日が主の喜ばれるように歩めるよう祈れることがとてもうれしいです。そして何が起こされてもそのことの背後に主の存在

を感じて日々歩めるようになりました。とはいえ、自分勝手な愛のない部分は何も変わりません。それでもこんな私を一方的に呼んでくださり、大きな愛でいつも包んでくださる主に感謝です。

最後にまだ救われていない私の両親と妹家族の救いをお祈りいただけたら幸いです。

三浦 敬

一九八〇年 東京都目黒区生まれ

目黒区立第十中学校卒 私立國學院高等学校卒

(株)日州舎、ロイヤルコントラクトサービス(株)

現在 ロイヤルホールディングス(株)勤務

妻／愛子、長女／真衣、次女／直

キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

【電話】0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

10:00 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:00

中高生日曜クラス 9:00



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によるこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、

主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、

無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。

礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、

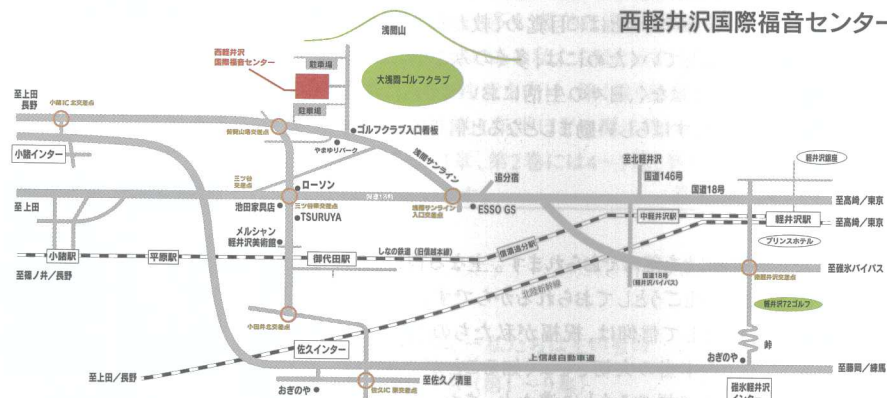
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。

快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター

【電話】0267-32-6400

長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 ☎389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

【電話】0267-32-6444

長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 ☎389-0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分(1000円程度)徒歩45分=3km

御代田へは東京駅より北陸新幹線にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。

■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

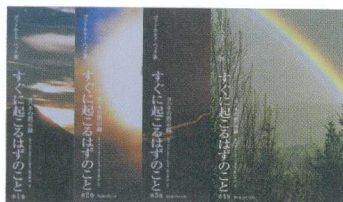


モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを感じ知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちに難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。

しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ—私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎらない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる 第46号

定価100円（税込み）2017年10月15日初版

編集スタッフ	清水洋一 古田公人 田中順治 石塚稔成 石塚優子 岩本秀造 岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守格太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会